

イブン・カイイム・ジャウズィーヤのスーフィズム思想に関する 先行研究レビュー

原 陸郎*

A Survey of Previous Studies on Ibn Qayyim al-Jawzīya's Ṣūfī Thoughts

HARA Rikuo

This paper aimed to examine previous studies on the ṣūfī thoughts of Ibn Qayyim al-Jawzīya (d. 751/1350), a prominent jurist, theologian, and apparently Qādirī ṣūfī of the Ḥanbalī School in Damascus during the Bahrī Mamlūk period (1250–1382), and presents the prospectus for future research in this area. Although the Ḥanbalī School and Sufism have been thought to be incompatible in Western scholarship for a long period, nevertheless, historically, this opinion has been proven incorrect. In this respect, reflecting on Ibn al-Qayyim's deliberations would be helpful in considering their relationships and affinities. He was generally known to be a disciple of Ibn Taymīya (d. 728/1328); however, he should be recognized for more than merely developing his master's ideas. He devoted himself to Sufism and left us with many writings focusing on Sufism, such as his enormous work *Madārij al-sālikīn* (*Ranks of the Divine Seekers*). Because of the interests of salafīya, wāḥḥābīya, and their relationship with his master, previous studies have mainly focused on his perspective as a jurist and theologian. However, his contribution to the realm of Sufism should not be underestimated for its elucidation of the relationship between Sufism and the Ḥanbalī School and the characteristics of Ḥanbalī Sufism.

I. はじめに

本稿の目的は、バフリー・マムルーク朝期(1250–1382)のダマスカスで活躍したハンバル学派の学者であるイブン・カイイム・ジャウズィーヤ(Muḥammad ibn Abī Bakr ibn Qayyim al-Jawzīya, d. 751/1350)のスーフィズム思想に関する先行研究を概観し、筆者の今後の研究課題を示すものである。

ハンバル学派とスーフィズムは従来相容れないものとして考えられてきたが、「スーフィズムの敵」とされてきた人物たちが実際にはカーディリー教団のシルスィラに連なっており、彼らが批判した対象はスーフィズムそのものではなかったとマクディシーが示して以来、対立するものとされることは少なくなった[Makdisi 1973; 1979]。しかし、これまでの研究では主に両者の関係性に注意が払われてきており、個人のスーフィズム思想についてはあまり関心が持たれてこなかった。それは本稿の対象とするイブン・カイイムについても同様である。

イブン・カイイムはイスラームの幅広い分野において活躍し、多くの著作を残した。近代での「再発見」までその影響力は限定的に理解されていたものの、彼の思想は脈々と受け継がれ、後述するように彼のスーフィズム思想は近現代のイスラーム改革運動の担い手であるムハンマド・ラシード・リダー(Muḥammad Rashīd Riḍā, d. 1935)からも評価されていた。イブン・カイイムはイブン・タイミーヤ(Taqī al-Dīn Aḥmad ibn Taymīya, d. 728/1328)の弟子として最も有名であり、師の言説の擁護と普及に従事したため、サラフィー主義者からの評価が非常に高い。それゆえ、法学・神学

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

分野における研究が盛んである一方で、スーフィズム分野では比較的議論が進んでおらず、今後の進歩が待ち望まれるのが現状である。

彼は師のイブン・タイミーヤと並び、サラフィー主義たちの理論的源泉であって来た。彼らがイブン・カイイムの思想を受容していく過程で、彼のスーフィズム思想をどのように取り扱ったかを考えることは重要ではないであろうか。彼らのスーフィズム理解を通して、何をスーフィズムと見做し、また何がそうではなかったのかについて再考する契機にもなり得ると考えられるからである。また、「道徳」を強調した近代のスーフィズムと、イブン・カイイムのスーフィズムは一致する部分が多い。以上のことから、ハンバル学派のスーフィズムについて研究不足であるという現状に加え、近現代のイスラーム思想・スーフィズム研究においてもイブン・カイイム研究は重要であると考えられる。

本稿では、まず2章においてハンバル学派とスーフィズムについて、3章でイブン・カイイムについて概観する。続く4章でイブン・カイイムのスーフィズム思想に関する先行研究を紹介し、最後に5章で4章の内容を踏まえた筆者の今後の研究の展望を示す。

II. ハンバル学派とスーフィズム

II-1. ハンバル学派とスーフィズムの関係性

マクディシーはイブン・タイミーヤがスーフィズムそのものを否定しておらず、また彼自身がカーディリー教団に属していたスーフィーであると論じた [Makdisi 1973]¹⁾。この論文が書かれた当時は、アブドゥッラー・アンサーリー(‘Abd Allah al-Anṣārī al-Harawī, d. 481/1089)²⁾ やアブドゥルカーディル・ジラーニー(‘Abd al-Qādir al-Jīlānī, d. 561/1166)³⁾ がハンバル学派に属したスーフィーであったということすらあまり周知されていなかったため、ハンバル学派とスーフィズムの関係性を再考する嚆矢というべき論考であった。1章で述べたように、マクディシーはハンバル学派に属していた多くの人物がスーフィーでもあり、従来「スーフィズムの敵」として考えられてきた学者たち——イブン・クダーマ(Muwaffaq al-Dīn ibn Qudāma, d. 620/1223)⁴⁾ やイブン・タイミーヤら——が実際にはカーディリー教団に属するスーフィーであったとスィルスィラを用いて示し(図1を参照のこと)、イブン・ジャウズィー(Abū al-Faraj ‘Abd al-Rahmān ibn ‘Alī ibn al-Jawzī, d. 597/1201)⁵⁾ もまたスーフィーであり、スーフィズム批判の作品であると知られていた『悪魔の装い(Talbīs Iblīs)』はスーフィズム全般に対しての否定ではないとした [Makdisi 1973; 1979]。また、伝承主義とスーフィズムの親和性についても論じている。この2つの論考以降、ハンバル学派とスーフィズムは必ずしも対立せず、両立し得るものとして論じられ、両者の関係性が着目されることとなった。

しかし、バグダードにおける初期ハンバル学派と同時代の初期スーフィーの関係を論じたメル

- 1) 複数のタリーカに属していたが、その中でもカーディリー教団が最良のものであると主張したと伝えられている [Makdisi 1973: 124]。
- 2) ヘラート出身のスーフィー。ハンバル学派に属していたが、学派内で批判の対象となることもあった。ペルシア語とアラビア語で多数の作品を著し、代表作としては神秘階梯論を説いた『旅人たちの宿駅(Manāzil al-sā’irīn)』や『100の広場(Ṣad maydān)』、『スーフィー列伝(Ṭabaqāt al-ṣūfīya)』などがある。
- 3) カーディリー教団の名祖。彼が実際にスーフィーであったかについては諸説がある。イブン・タイミーヤは彼の『不可視の開示(Futūḥ al-ghayb)』に対する注釈書を著している。
- 4) ハンバル学派の法学者であり、2代目正統カリフであるウマルの末裔。ダマスカスやバグダードで活動した。多数の法学書を著し、代表作として『ヒラキー綱要(Mukhtaṣar al-Khiraqī)』への注釈『大全(al-Mughnī)』や、『満足させるもの(al-Muqni’)』がある。
- 5) アッバース朝期のバグダードで活躍したハンバル学派の学者。スンナ派の擁護者・説教師として名高い。彼とスーフィズムの関係については、[Held 2020]などを参照のこと。

ヒェルトは、両者は同時期に同じ場所で発展したものの、互いに近い存在ではなかったと述べ、また初期のハンバル学派の伝承主義者たちはスーフィズムに対し懐疑的であり、両者の持つ敬虔さは互いに一致しないと結論づけた [Melchert 2001]。それに対し、ポストは初期の段階で対立関係にあったとしてもそれは長く続かず、4/10世紀頃のスーフィーたちは伝承主義者らと同様にハディースへの関心を共有していたことから、伝承主義者たちがスーフィズムから離れていったのではなく、むしろスーフィズムが伝承主義と袂を分かっていったと反論している [Post 2017: 8–9]。

現代におけるハンバル学派とスーフィズムの関係性についてはあまり論じられることがないが、ワッハーブ派を奉じており反スーフィズムとして有名なサウジアラビアではその復活の兆しがあるという [Ambah 2006]。保坂はアンバーの記事を受け、同地においてスーフィズムがどのように扱われてきたか、またその現状などについて論じており、スーフィズムは「復活」したというよりも影を潜めていただけであると指摘している [保坂 2006]。

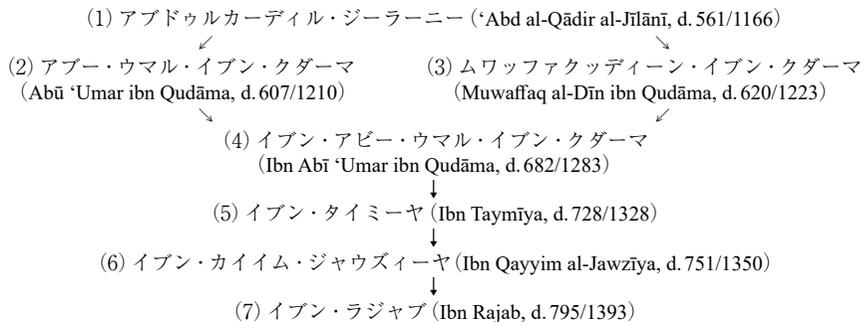


図1 カーディリー教団のシルスィラ [Makdisi 1973; 1979] を筆者和訳。

II-2. イブン・タイミーヤとスーフィズム

ハンバル学派とスーフィズムについて論じる上で、イブン・タイミーヤとスーフィズムの関係は議論の中心となってきた。[Makdisi 1973] によって提示されたイブン・タイミーヤが許容したスーフィズムの範囲には議論があり、これについては [東長 2013: 190–203] にまとまっている。マイヤーは [Makdisi 1973; 1979] 自体に懐疑的な見解を持ち、イブン・タイミーヤのカーディリー教団への所属と彼のスーフィズムの受容は誤解であると脚注中で批判した [Meier 1999: 317–318]⁶⁾ が、この批判に続く研究はなかった。アンジュムはマイヤーの批判は神秘主義がスーフィズムの構成要素として必要不可欠であるという誤解によると述べた [Anjum 2010: 156]。

一方で、イブン・タイミーヤは自身の著作の中ではヒルカ (khirqa) を新奇 (bid'a) として非難していることから、シャレンベルグは彼のカーディリー教団への所属やヒルカの引き継ぎなどのマクディスイーの主張には問題があると指摘している [Schallenbergh 2005: 460]。フーヴァーもシャレンベルグと同様の批判をしており、シルスィラは後代の捏造である可能性などを示している [Hoover 2019: 70–73]。

しかし、実際にはイブン・タイミーヤのサークル内でスーフィズムは許容されてきた。ポストはサークル内のスーフィズムや伝承主義者のスーフィズムについて論じており、ワースィティー ('Imād al-Dīn Aḥmad al-Wāsiṭī, d. 711/1311) やバアラバッキー (Zayn al-Dīn 'Abd al-Raḥmān

6) 初出は、Fritz Meier, "Das Sauberste über die Vorbestimmung: Ein Stück Ibn Taymiyya," *Saeculum*, 32, 1981, pp. 74–89.

al-Ba‘labakkī, d. 734/1333) といったスーフィーたちがサークル内にいたことが明らかになっている [Post 2016; 2017]⁷⁾。その一方で、イブン・カイイムとこの2人のスーフィーの思想的な繋がりは現在のところ不明である。サークル内におけるスーフィズム研究はイブン・タイミーヤだけでなく、イブン・カイイムの思想解明にも繋がると考えられるため、注視する必要がある。

また、イブン・タイミーヤのスーフィズム理解がオスマン朝期にどのように扱われたかについて [Sheikh 2018] は論じている。この論考ではイブン・カイイムのスーフィズム思想も「タイミーヤ流タサウウフ」の範疇に括られているものの、当時既にスーフィズムの反対者として知られていたイブン・タイミーヤのスーフィズム理解を、アフマド・ルーミー・アークヒサーリー (Aḥmad al-Rūmī al-Āqḥiṣārī, d. 1041/1631 or 1043/1634) というスーフィーが受容していたことを提示している。

カーディリー教団への所属については未だに不明瞭なままではあるものの、彼はスーフィズムの全てを批判していたわけではなく、ある一定の範囲内でスーフィズムを許容していたというのが現時点での結論である。

III. イブン・カイイムについて

III-1. イブン・カイイムの伝記史料

イブン・カイイムについては、弟子であるイブン・ラジャブ (Ibn Rajab, d. 795/1393) による『ハンバル学派列伝補遺 (*Dhayl ‘alā Ṭabaqāt al-Ḥanābila*)』や、シャーフィイー学派に属した同じく弟子のイブン・カスィール (Ibn Kathīr, d. 774/1373) の『始まりと終わり (*al-Bidāya wa al-nihāya*)』、イブン・ハジャル・アスカラーニー (Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī, d. 852/1449) の『8世紀の重要人物における隠れた真珠 (*al-Durar al-kāmina fī a’yān al-mī’a al-thāmina*)』、イブン・タグリール・ビルディー (Ibn Taghrī Birdī, d. 874/1470) の『輝く星々 (*al-Nujūm al-zāhira*)』、ジャラルルッディーン・スューティー (Jalāl al-Dīn al-Khūdayrī al-Suyūṭī, d. 911/1505) の『意識の望み (*Bughya al-wu‘ā*)』、シャウカーニー (al-Shawkānī, d. 1255/1839) の『昇る満月 (*al-Badr al-ṭālī‘*)』、アールスィー (al-Ālūsī, d. 1270/1854) の『2人のアフマドの審理における2つの目の解明 (*Jalā’ al-‘aynayn fī muḥākama al-Aḥmadayn*)』などによって伝えられている。主に用いられる伝記史料はイブン・ラジャブやイブン・カスィール、イブン・ハジャルによるものであり、また、現代のものでは [Bakr Abū Zayd 1995] が最も包括的なものである。

III-2. イブン・カイイムの生涯⁸⁾

イブン・カイイムとして知られる Abū ‘Abd Allāh Shams al-Dīn Muḥammad ibn Abī Bakr ibn Ayyūb al-Zur‘ī⁹⁾ al-Dimashqī は 691年サファル月7日 / 1292年1月29日にダマスカスで誕生した。彼の父親がジャウズィーヤ (al-Jawzīya)・マドラサ¹⁰⁾のカイイム (qayyim, 監督官) であった¹¹⁾ため

7) 博士論文である [Post 2017] を基にした *The Journeys of a Taymiyyan Sufi: Sufism through the Eyes of ‘Imād al-Dīn Aḥmad al-Wāsiṭī (d. 711/1311)* が 2020年8月にブリルから刊行予定である。

8) イブン・カイイムの生涯については、[Abdul-Mawjūd 2006] や [Holtzman 2009]、[Krawietz 2006] などとも参照のこと。

9) al-Zar‘ī と表記する場合もある。ザルウ (Zar‘) はハウラーン (Hawrān) 地方に位置する農村の名前であり一族がその出身であったが、(おそらくモンゴル軍から逃れるために) 家族がダマスカスへと移った後にイブン・カイイムが誕生した [Krawietz 2006: 20]。

10) イブン・ジャウズィーの息子が設立したハンバル学派のマドラサ。フランス植民地統治に対するシリア大反乱で 1925年に焼け落ちた。

11) qayyim の訳として多くの研究では superintendent が充てられているが、ココシユカとクラヴィーツは janitor の方がより正確であると主張しており、イブン・カイイムの出自の低さを強調している [Kokoschka and Krawietz 2013:]

このラカブで呼ばれているが、「カイム」は「監督官」のみを意味し、他の意味があるわけではない。

彼は複数の師のもとで、タウヒード (tawhīd)、宗教の原理 (uṣūl al-dīn)、神学 (‘ilm al-kalām)、クルアーン解釈 (tafsīr)、ハディース学、法学 (fiqh)、法源学 (uṣūl al-fiqh)、相続法 (al-farā’id)¹²⁾、アラビア語、文法などの諸学問を幅広く修めた¹³⁾。また、イブン・タイミーヤの論敵として知られていたシャーフィイー学派のサフィーユッディーン・ヒンディー (Ṣafī al-Dīn al-Hindī, d. 715/1315) にも師事しており、彼のもとでアシュアリー学派の神学を学んでいた。イブン・タイミーヤと出会うまで、イブン・カイムは同学派の神学に惹きつけられていたが、712/1313年にカイロから帰ってきたイブン・タイミーヤに弟子入りした後はそれを放棄し¹⁴⁾、以後は神学的にはハディースの徒¹⁵⁾に属した。

726/1326年にイブン・カイムはエルサレムで預言者や聖者らの墓、特にイブラーヒームの墓参詣を禁止する説教を行い、またナブルスにて同様の説教をしたためダマスカスに召喚されたが、彼は発言を撤回すると解放された [Bori and Holtzman 2010: 19]。その後弟子ではなくイブン・タイミーヤに対する抗議運動が展開され、同年にイブン・タイミーヤは過去の聖者廟参詣批判を理由としてイブン・カイムと共にダマスカス城に投獄されることとなり、別々の房に収監された¹⁶⁾。その期間にイブン・カイムはクルアーンの暗唱や瞑想に勤しみ、神秘的感覚を獲得したとイブン・ラジャブによって伝えられている。728/1328年に師が獄中で亡くなると釈放された。

師の死後、イブン・カイムはハリール (ヘブロン) を聖地として認めなかったために少なくとも二度逮捕されるなどした [Holtzman 2009: 220]。また、師とは違い彼は温厚な性格で知られていたが、ダマスカスのシャーフィイー学派のカーディー長であったタキーユッディーン・スプキー (Taqī al-Dīn al-Subkī, d. 756/1355)¹⁷⁾ とは 746/1345年と 750/1349年に二度論争を繰り広げた。しかし、これらは激化せずに終息した¹⁸⁾。いずれの論争も、イブン・カイムがイブン・タイミーヤの法の見解を支持したことが問題となったためである。

イブン・カイムの職歴は華やかなものではなかった。これは彼が師の言説を擁護したことによる。736/1336年にはモスクで初めてのフトバ (khuṭba) を行った。743/1342年にはサドリヤ (al-Ṣadrīya)・マドラサで就任講演を行い、それ以降生涯同マドラサで教えた。また、父が監督官であったジャウズィーヤ・マドラサのイマームも務めた。

751年ラジャブ月23日 / 1350年9月26日に彼はその生涯を終えた¹⁹⁾。ダマスカスのウマイヤ・モスクで行われた葬儀には群衆が集まったと伝えられている。彼はダマスカスのバーブ・アッ=サギール墓地に埋葬され、弟子のイブン・ラジャブも後にこの墓地に葬られることとなった。

16]。ここではより一般的である前者の訳を採用し、監督官とする。

12) イブン・カイムの父親は相続法の専門家でもあった。

13) これらの修めた学問は伝記史料によるものであるが、イブン・カイムは実際には幅広い科学的知識とギリシャの科学的伝統に対する確かな知識を持っていたという指摘がある [Bori and Holtzman 2010: 17]。

14) このことについては、イブン・カイム自身が『十分かつ癒し (の詩)』で述べている [Holtzman 2009: 209]。

15) 法学派と神学派の対応関係については [松山 2016: 69–74] を参照のこと。また、ハンバル学派の神学について通史的にまとめたものとして [Hoover 2016] がある。

16) 逮捕時には辱められ、ラクダに乗せられ市中を引き回された。

17) タキーユッディーン・スプキーおよびスプキー家については [近藤 1999] を参照のこと。

18) 746/1345年は競走・射撃競技 (musābaqa) について、750/1349年は離婚 (talāq) についての論争。前者ではイブン・カイムが折れ、後者にはベドウィンのアミールが介入し大事には至らなかった [Laoust 1971]。

19) イブン・カスィールは、イブン・カイムは同年ラジャブ月13日 / 9月16日に亡くなったと伝えており、[al-Jawziya 2020] はこちらの日付を採用している。

当時のダマスカスがハンバル学派の学問の中心地の1つであったため、基本的にイブン・カイムは生涯のほとんどをダマスカスで過ごし、遊学を行うことはなかった。しかし、マッカには数度訪れており同地で複数の作品を著した²⁰⁾。また、カイロを訪れたという記録も残っている²¹⁾。

生涯独身であったイブン・タイミーヤとは違い、彼は結婚し3人の息子がいた。その1人であるアブドゥッラー(‘Abd Allah ibn Muḥammad, d. 1355)はサドリヤ・マドラサでイブン・カイムの跡を継いだ。

III-3. イブン・カイムの著作²²⁾

イブン・カイムはイスラーム学において非常に幅広い分野で作品を著した。著作は全てアラビア語で書かれており、100作品近くを残したと言われているが正確な数字は定かではなく、現存していないものもある。また、彼の著作の大部分を収録したCD-ROMがある[al-Jawzīya 1419/1999]。著作の写本情報については、[al-Shiblī 1423/2002: 235–304]²³⁾に詳しい。

イブン・カイムの著作はスンナ派イスラーム世界で広く流通している。特に近年、サウジアラビアで多くの学者が彼の著作を編纂し、学術的に写本を校訂している[Ovadia 2018: 14]。アラビア語の刊本だけではなく、英語やインドネシア語、ヒンディー語などに訳されたものも少なくないが、それらの中には作品の一部のみを抜粋して出版したものや、本来の作品名とは異なったタイトルで出版される場合もある。イブン・カイムの著作は人気であり入手は容易い一方で、これらのことには注意する必要がある。また、同じくハンバル学派に属した学者であるイブン・ジャウズイーと名前が似通っていることから両者の作品の混同も見られる。

この節では、[Holtzman 2009]による著作リストおよびその分類を参考にしながらイブン・カイムの著作を紹介する。彼の著作には書かれた時期が記されていないため、この分類も便宜的なものであることに注意したい²⁴⁾。また、以下の著作以外にもイブン・タイミーヤの著作名をまとめた『イスラームの師、イブン・タイミーヤの作品名 (*Asmā' mu'allafāt shaykh al-Islām Ibn Taymīya*)』などがある。なお、イブン・カイムの法学作品のいくつかは著作として残っているが、それらのほとんどは現存していないか、あるいは他の著作の中に同化されているかのどちらかであり、彼の著作全てを特定するのは現在のところ不可能である[Holtzman 2009: 207]。

〈初期作品〉

1. 『イェルサレム啓示 (*al-Futūḥāt al-qudsīya*)』◆非現存
— イブン・アラビーの『マッカ啓示 (*al-Futūḥāt al-makkīya*)』を暗示したタイトル
2. 『マッカからの贈り物 (*al-Tuḥfa al-makkīya*)』◆非現存
— 愛に関する議論、受肉 (*ḥulūl*) や神との合一 (*ittihād*) の否定、来世について
3. 『澄んだ泉 (*al-Mawrid al-ṣāfī*)』◆非現存

20) イブン・カイムはマッカに住居を所有していた。また同地の住民が、彼がタワーフ (*tawāf*) を複数回行うなどの行為に驚いていたと記録されている [Krawietz 2006: 22–23]。

21) いつ訪れたかは不明であるが、剃髪によって体内の毒素を排出することができるという発見をカイロの医師たちに教えたと伝わっている [Holtzman 2009: 212]。

22) 著作については、[Holtzman 2009] や [Krawietz 2006]、[Bell 1979] などを適宜参照した。

23) 初出は、‘Alī ibn ‘Abd al-‘Azīz al-Shiblī, *Al-Thabat: Fī-hi Qawā'im bi Ba'd Makhtū'āt Shaykh al-Islām Aḥmad Ibn Taymīya wa ma'a-hu Mulḥaq bi Ba'd Makhtū'āt al-'Allāma Ibn Qayyim al-Jawzīya*, Riyad: Dār al-Waṭan li al-Nashr wa al-I'lām, 1417/1996.

24) この分類に対する異論はあるが [Sliti 2015: 35–36]、本稿では最も一般的なホルツマンのものに依拠する。

——愛とその種類、状態、神への専心について

4. 『魂の知 (*Ma'rifat al-rūh*)』◆非現存
 - 『魂の書』の基になったと考えられる
5. 『アブー・ダーウードの『スナン』の校訂 (*Tahdhīb Sunan Abī Dāwūd*)』
 - アブー・ダーウード (*Abū Dāwūd*, d. 889) の『スナン』を整理し、注解した
6. 『真正と脆弱なハディースの高い灯台 (*al-Manār al-munīf fī al-ṣaḥīḥ wa al-ḍa'īf*)』、もしくは『ハディース批評と、容認可否を区別する試金石 (*Naqd al-manqūl wa al-miḥakk al-mumayyiz bayna al-mardūd wa al-maqbūl*)』
 - 偽ハディースを見分ける方法について
7. 『騎士道 (*al-Furūsīya*)』
 - イブン・カイイムの最初期の法学作品
8. 『諸世界の主についての署名者たちへの教示 (*I'lām al-muwaqqi'īn 'an rabb al-'ālamīn*)』
 - 重要な法源学の論をまとめたもの。法学派の権威を否定し、タクリードの禁止とイジュティハードの義務を論証している [中田 2002]
9. 『魂の書 (*Kitāb al-rūh*)』
 - 霊魂論についての作品であり、ハディースなどの引用が多い
10. 『礼拝における理解の明瞭化と最良の人間への平安 (*Jalā' al-afḥām fī al-ṣalāt wa al-salām 'alā khayr al-anām*)』
 - ハディースに基づき、礼拝の有効性について論じた
11. 『礼拝とそれを怠る者への法規定の書 (*Kitāb al-ṣalāt wa ḥukm tāriki-hā*)』
 - 上と同じく、礼拝についての法学作品
12. 『クルアーンにおける宣誓の説明 (*al-Tibyān fī aqsām al-Qur'ān*)』
 - クルアーンにおける宣誓の意味や感嘆的性質を持つ章句について説明したもの
13. 『善言の豪雨 (*al-Wābil al-ṣayyib min al-kalim al-ṭayyib*)』
 - ズィクル (*dhikr*)²⁵⁾ によって得られる利点について論じたもの
14. 『ユダヤ教徒とキリスト教徒の応答における困惑した者たちへの導き (*Hidāya al-ḥayārā fī ajwiba al-Yahūd wa al-Naṣārā*)』
 - ユダヤ教徒とキリスト教徒への批判
15. 『歌を聴くことの法規定に関する覆いの除去 (*Kashf al-ghīṭā' 'an ḥukm samā' al-ghinā'*)』
 - 音楽・踊り・スーフィーの実践に対する見解

〈中期作品〉

1. 『ズィンミーに関する法規定 (*Aḥkām ahl al-dhimma*)』
 - ズィンミー (庇護民) に対する取り扱いについて
2. 『シャリーアによる統治における統治の道 (*al-Ṭuruq al-ḥukmīya fī al-siyāsa al-shar'īya*)』
 - イブン・タイミーヤの『シャリーアによる統治 (*al-Siyāsa al-shar'īya*)』を反映したものであり、統治のあらゆる側面について扱っている
3. 『救助された学派の勝利における十分かつ癒し (の詩) (*al-Kāfiya al-shāfiya fī al-intiṣār li al-firqa al-nājiya*)』、もしくは『ヌーンのカスイーダ (*al-Qaṣīda al-nūniya*)』

25) イブン・カイイムはズィクルを想起・言及・唱名の意味を混ぜながら用いた [al-Jawzīya 2000: 133, n. 99]。

- 神学的問題を扱った詩。ムウタズィラ学派とアシュアリー学派を強く批判した
4. 『属性剥奪論者とジャフム派の攻撃に対するイスラームの軍隊の招集 (*Ijtīmā' al-juyūsh al-islāmīya 'alā ghazw al-Mu'aṭṭila wa al-Jahmīya*)』
— ムウタズィラ学派を属性剥奪論者として、アシュアリー学派の思弁神学とイブン・アラビー学派の存在一性論をジャフム派として批判した作品
5. 『病氣と治療薬 (*al-Dā' wa al-dawā'*)』、もしくは『有効な薬を請う者への十分な返答 (*al-Jawāb al-kāfi li man sa'ala 'an al-dawā' al-shāfi*)』
— 心の病とその治療法について取り扱った神学作品
6. 『喜びの国への魂の導き (*Hādī al-arwāḥ ilā bilād al-afrāḥ*)』
— 天国についてのハディースを69個の章に分けて論じた神学作品
7. 『恩恵の驚異 (*Badā'i' al-fawā'id*)』
— 文法、修辞学、詩学、クルアーン、ハディースを扱ったもの
8. 『恋人たちの庭と切望する者たちの散歩 (*Rawḍa al-muḥibbīn wa nuzha al-mushtāqīn*)』
— 愛について取り扱った神学作品
9. 『幸福の家への鍵と、知識と意思の主権の布告 (*Miftāḥ dār al-sāda wa manshūr wilāya al-'ilm wa al-irāda*)』
— 神学・自然科学・疑似科学が織り交ぜられた作品

〈後期作品〉

1. 『予定と定め・知恵・因果の問題における病人の癒し (*Shifā' al-'alīl fī masā'il al-qaḍā' wa al-qadar wa al-ḥikma wa al-ta'līl*)』
— 神の予定(カダーとカダル)についての問題を取り扱ったイブン・カイイムの著作の中でも独特の作品であり、第3章では彼のスーフィー的傾向が現れている
2. 『ジャフム派と属性剥奪論者に対し発された雷 (*al-Ṣawā'iq al-mursala 'alā al-Jahmīya wa al-Mu'aṭṭila*)』
— 神の属性におけるムウタズィラ学派の考えに対する批判であり、『イスラームの軍隊の招集』を発展させたものであると推測され、イブン・タイミーヤの神学を受け継いでいる。後半部分のみ現存している
3. 『恩恵 (*al-Fawā'id*)』
— 読者に恩恵をもたらす考え、見解、祈り、解釈について論じた作品。クルアーンやハディース解釈にはアシュアリー学派的傾向が見られる
4. 『悪魔の罠に苦しむ者への救助 (*Ighātha al-lahfān min maṣāyid al-shayṭān*)』
— 正しい道から外れた人々の問題を取り扱ったもの
5. 『忍耐する者たちの用意と感謝する者たちの蓄え (*'Udda al-ṣābirīn wa dhakhīra al-shākirīn*)』
— スーフィズムの術語である「忍耐」と「感謝」について論じた作品
6. 『2つの移住の道と2つの喜びの門 (*Ṭarīq al-hijratayn wa bāb al-sā'adatayn*)』
— アンサーリー『旅人たちの宿駅』への注釈である。イブン・アリーフ (Ibn 'Arīf, d. 536/1141) の『諸集会の美点 (*Maḥāsīn al-majālis*)』²⁶⁾ に対しても言及している

26) イブン・アリーフおよび『諸集会の美点』については、[Elliot and Abdulla 1980: 8–19; Casewit 2017: 61–63]などを参照のこと。

7. 『「私たちはあなたにこそ仕え、あなたにこそ助けを求める」²⁷⁾の宿駅間の修行者たちの階梯 (Madārij al-sālikīn bayna manāzil īyāka na 'budu wa īyāka nasta 'īn)』
 ——『旅人たちへの宿駅』への注釈、イブン・カイムのスーフィズム作品の中では最も有名
8. 『新生児を扱う法に関する最愛の贈り物 (Tuḥfa al-mawdūd bi aḥkām al-mawlūd)』
 ——出産、乳児の世話、子育てに関する包括的案内であり、預言者の医学のカテゴリーに近い
9. 『最良の人々の教えにおける来世の糧食 (Zād al-ma'ād fī hady khayr al-'ibād)』²⁸⁾
 ——預言者伝であり、彼の生活様式を模倣することの重要性を説いた
10. 『預言者の医学 (al-Ṭibb al-nabawī)』²⁹⁾
 ——ハディースに基づいた心身の病気の治療法について

イブン・カイムはほとんどの作品を師の死後、つまり釈放後から著し始めた。初期作品は散文体で、ハディースなどの信憑性の高い資料に強く依拠し、またある特定のジャンルやテーマに集中していた。中期作品では法学・神学・修辞学・論争について論じながら、スーフィーの用語やテーマを暗示している。後期作品は彼の深いスーフィズムへの理解とイブン・タイミーヤの教えを合わせたものである [Holtzman 2009: 207]。

[Bell 1979]によれば、初期作品は信頼できる資料からのスナナの引用であり、法学や実践的宗教倫理を強調しており、スーフィズムへの強い関心はみられない。これはおそらく正しく、[Holtzman 2009]の初期作品の分類とも一致する。しかし、『善言の豪雨』はズィクルによって得られる利点について論じた作品であり、その中ではスーフィズムの階梯論を意識している記述も存在しており、また、アンサーリーを「イスラームの師」と呼んでいる。この著作は後期の『2つの移住の道』と『修行者たちの階梯』でも引用されており [al-Jawziya 2000: xv]、スーフィズム分野における彼の思想の一貫性がある程度確認できる。

イブン・カイムのスーフィズム思想を論じるための重要な著作として『修行者たちの階梯』、『2つの移住の道』、『魂の書』、『悪魔の畏に苦しむ者への救助』、『恋人たちの庭』、『覆いの除去』、『十分な返答』などが挙げられるが、これらの著作の中で特に重要なものは2つある。1つ目は『修行者たちの階梯』で、これはアブドゥッラー・アンサーリーが神秘階梯論を説いたアラビア語の著作『旅人たちの宿駅』への注釈書である。アンサーリーはこの作品の中で100の階梯を説明しているが、それぞれの階梯について簡潔にしか論じていないのに対して、イブン・カイムはそれぞれにかなりの量の注釈を加えた³⁰⁾。また、ムハンマド・ラシード・リダーは『修行者たちの階梯』を近代では初めて刊行し、「スーフィズムと道徳に関する最高の著作」と序文で評している [al-Jawziya 1311/1912: 8]。また、2020年5月にはアンジュムによる翻訳がブリルから刊行され始めている。

2つ目は『2つの移住の道』であり、これも同様に『旅人たちの宿駅』への注釈書であるが、この作品はアンダルスのスーフィーであるイブン・アリーフによる『旅人たちの宿駅』への注釈書『諸集会の美点』への実質的な注釈であると指摘されている [Bell 1979: 95–96]。しかし、これに対しアンジュムは、『旅人たちの宿駅』への注釈書ではなく独立した専門書であり、1つの大きな節のみを『諸集会の美点』の批判に充てたものであると主張している [Anjum 2010: 161–162]。いずれに

27) 『クルアーン』1章5節からの引用。

28) おそらくイブン・カイムの最後の著作である。

29) 厳密にはこの作品は『来世の糧食』の分冊版である。

30) Beirut: Dār al-Kitāb al-'Arabi 版では1巻が約500ページで、3巻から成る。

せよ、『修行者たちの階梯』と比較するとその研究は依然として進んでおらず、アンジュムも具体的にどの箇所がイブン・アリーフに対する批判であるかを示していない。

邦訳されたものについて述べると、完訳されたものは存在しないが、イブン・カイイムの『喜びの国への魂の導き』の抄訳である『イスラームの天国』がある。また、『修行者たちの階梯』の「グルバ(ghurba)³¹⁾章」を訳した[石郷岡2019]がある。イブン・タイミーヤのグルバ論についての[石郷岡2017]もあり、石郷岡はこの2つの論考で「奇妙なもの」のハディースについて現代のイスラーム主義運動の観点から分析し、イブン・タイミーヤとイブン・カイイムの考えの違いを指摘している。

III-4. イブン・カイイムとイブン・タイミーヤ

初期の伝記史料からは両者の関係について、イブン・カイイムはイブン・タイミーヤの教えに精通していたこと、師の著作の普及に貢献したこと、そして師の知識を自由かつ創造的に引き出したことを窺うことができる[Bori and Holtzman 2010: 27-28]。思想の同一性だけでなく、イブン・カイイムは師の著作から段落や章をそのまま引用していることから単なる模倣だと見做されることも少なくなかったが、それは彼の独創性を否定するものではない[Holtzman 2009: 205]。また、アブドゥルマウジュードは両者の論じたトピックの違いや、見解の相違を指摘している[Abdul-Mawjūd 2006: 84-92]。『幸福の家への鍵』を部分的に英訳したゼニは両者を比較して、イブン・タイミーヤが哲学者たちや神学者たちの誤りを指摘することに大いに関心を持っていた一方で、イブン・カイイムは後期作品において、神秘主義者たちを正統イスラームの範疇に戻すことに集中していたと述べている[al-Jawzīya 2016: xv]。

しかし、ハンバル学派内におけるイブン・タイミーヤの思想の影響力は限定的であり、彼らの時代でさえハンバル学派の教義として奉じられることはなく、高く評価されるのはイブン・アブドゥルワッハブ(Ibn ‘Abd al-Wahhāb, d. 1206/1792)以降であった[Hoover 2016: 642]。イブン・カイイムとイブン・タイミーヤの両者はイスラーム改革者たちによって再発見され、彼らの著作の価値は急激に高まることとなったのである[Kokoschka and Krawietz 2013: 1]。

イブン・カイイムは師と同様に、新奇、ギリシア哲学の影響を受けたイスラーム哲学、シーア派、イブン・アラビー(Ibn al-‘Arabī, d. 638/1240)学派および彼らの存在一性論、極端な形式のスーフイズム³²⁾を否定した[al-Jawzīya 2000: ix]。法学においてはイブン・タイミーヤと意見を異にする場合も少なくなかった[Anjum 2010: 156]一方で、神学の分野においては基本的に同一の思想を持っていた。イブン・カイイムの神学作品の多くはイブン・タイミーヤの言説を洗練させたものであるため[Holtzman 2009: 205]、神学を研究するためには両者の著作を視野に入れる必要がある。

IV. イブン・カイイムに関する先行研究

IV-1. イブン・カイイムに関する研究動向³³⁾

イブン・カイイムへの関心はイブン・タイミーヤと共にイスラーム改革者たちの再発見によって

31) 離別、奇妙、疎外などを意味する。

32) 代表例として、ハッラージュ(al-Hallāj, d. 309/922)が挙げられる。イブン・タイミーヤのハッラージュへの態度についての研究として、[Michot 2007]がある。

33) イブン・カイイムの研究史については、[Bori and Holtzman 2010; Kokoschka and Krawietz 2013]にまとめられている。

高まったが、西洋では師と比較するとあまり注意が払われてこなかった。2000年代に入るまで西洋における研究は数少なく、彼に関する研究がそれ以前に刊行されることはなく、著作の翻訳もほとんどなかった [Kokoschka and Krawietz 2013: 5–6]。また、ユダヤ教・イスラーム間の研究においてイブン・カイムは比較的早くから登場していたが、彼に関する研究がその中心となることはなかった [Bori and Holtzman 2010: 32–33]。

近年のイブン・カイムへの関心の高まりは、彼についての論集である [Bori and Holtzman 2010] や [Krawietz and Tamer 2013] の刊行に代表される。また、特にイブン・カイムの神学³⁴⁾に関心が集まっており、研究が盛んに行われている。その中にはイブン・タイミーヤ神学の研究者であるフーヴァーの [Hoover 2009; 2010] もある。イブン・カイム神学についてはホルツマンがその代表的な研究者であり、多くの論考を著している。また、ホルツマンの指導下でオヴァディアはイブン・カイムの神学思想に関する博士論文を執筆し、それを基にした [Ovadia 2018] がブリルルから出版されている。

IV-2. イブン・カイムのスーフィズム思想に関する先行研究

伝記史料から読み取れるイブン・カイムのスーフィズムへの態度は、[Krawietz 2006: 22–23, 26–27] にまとめられており³⁵⁾、彼がスーフィズムの知識に精通していたこと、夜通し神に祈りを捧げていたこと、ズィクルを実践していたことなどが示されている。しかし、それらからイブン・カイムのスーフィズム思想を読み取ることには限界がある。

イブン・カイムのスーフィズム思想に関する先行研究は多くない。ラウストは彼とスーフィズムの関係について触れ [Laoust 1965]、マクディスィーはイブン・カイムがイブン・タイミーヤの弟子で『修行者たちの階梯』というスーフィズム作品を著したと述べているが [Makdisi 1973]、両者ともその指摘のみに留まっている。

アラビア語による研究では [Sharaf al-Dīn 2004]³⁶⁾ がある。シャラフッディーンによれば、イブン・カイムはスーフィズムにおける存在一性論、宗教的義務を逸脱する言説、ハキーカとシャリーア間の分離、知識 ('ilm) に対する味得 (dhawq) の優先、神が制定していない方法での崇拝の5点を批判した [Sharaf al-Dīn 2004: 381]。その後の西洋での研究と同じく、その分析には『修行者たちの階梯』が用いられている。

西洋における研究の先駆けとしては、まず [Bell 1979] が挙げられる。厳密に言えばこれはスーフィズム研究としてイブン・カイムを取り上げたものではないが、西洋ではベルが初めて著作を時系列順に論じるなど、イブン・カイム研究の先駆けであるといえる。

ベルによれば、イブン・カイムはイブン・ジャウズィーヤの道徳的思想とイブン・タイミーヤの神学的思想を発展させ、より包括的に愛を論じたとしている。また、イブン・カイムの記述を神学的・スーフィズム的にそれぞれ分析しており、示唆に富んでいる。ベルはイブン・カイム自身がスーフィーであったかについては慎重な立場を採っており、イブン・カイムは彼の議論を高める目的だけにスーフィーの推論を許容しており [Bell 1979: 177]、また『2つの移住の道』や『修行者たちの階梯』を通してスーフィズムの術語をイスラームの従来への教えを説明するためだけに操

34) イブン・カイムの神学については [Hoover 2016: 641–642] に簡潔にまとまっている。

35) イブン・ラジャブ、イブン・カスィール、イブン・ハジャルによるもの。

36) 初出は、'Abd al-'Azīm 'Abd al-Salām Sharaf al-Dīn, *Ibn Qayyim al-Jawzīya: 'Asru-hu wa Manhaju-hu wa Ārā'u-hu fī al-Fiqh wa al-'Aqā'id wa al-Taṣawwuf*, Cairo: Maktaba Nahḍa Miṣr, 1956.

作したと主張している [Bell 1979: 180]。以降の研究においても、これらのことについては論点となってきた。

イブン・カイイムに関するスーフィズム思想研究はシャレンベルグによる一連のものから始まったと言える。シャレンベルグは『修行者たちの階梯』などを分析し、イブン・カイイムのスーフィズムについての論考を5本著した。また、そのほかにもシャレンベルグによる未刊行の博士論文として、[Schallenberg 2008b]がある。最初に、シャレンベルグは『預言者の医学』、『悪魔の罠に苦しむ者への救助』、『恋人たちの庭』、『十分な返答』、『魂の書』を参照し、イブン・カイイムの靈魂論について論じた [Schallenberg 2001]。イブン・カイイムはイブン・タイミーヤの影響を強く受けている一方で、より心情的に取り組んでいるという。[Schallenberg 2001] 以降のシャレンベルグの関心は『修行者たちの階梯』へと移っていった。

次にシャレンベルグはスーフィズムにおける陶醉と恍惚について論じ、イブン・カイイムはスーフィズム用語を慎重に説明し、疑わしい部分についてはシャリーアに適するかを明確にし、合一派 (ittihādiyya) の解釈は否定しながら、それらの用語がクルアーンとスンナに還元できるように努めたと主張している [Schallenberg 2005]。また、イブン・カイイムとイブン・タイミーヤはシャリーアを霊的なものにする意図があったのであろうと結論づけている [Schallenberg 2005: 474]。[Schallenberg 2008a] ではスーフィズムにおける道について論じ、道はクルアーンとスンナによる真っ直ぐのものしかなく、イブン・カイイムはスーフィズム用語をクルアーンとハディースに沿う形に戻したと主張している。[Schallenberg 2010] ではズィクルとサマーウについて論じ、イブン・カイイムはズィクルの有用性については容認していた一方で、サマーウ (samāʿ) についてはいかなる形式においても禁止していたと述べている。この論考では、同じく『旅人たちの宿駅』への注釈書を著した、イブン・アラビー学派のティリムサーニー (ʿAfīf al-Dīn al-Tilimsānī, d. 690/1291)³⁷⁾ と比較し、分析している。

[Schallenberg 2013] は一連の研究をまとめたものであると言える。この論考では最初にベルの主張を採用し、『修行者たちの階梯』および『2つの移住の道』はスーフィズム作品であると必ずしも言い切れないとしており、イブン・カイイムは上記の作品を通じて神秘家の用いた術語をシャリーアの規則と倫理に沿ったものに修正するよう努めたと論じている。[Schallenberg 2013] は最終的に [Schallenberg 2005; 2008a; 2010] から発展し、イブン・カイイムはシャリーアを単なる義務ではなく信徒の心に訓育するためにスーフィーの語彙を取り入れようとしていたと結論づけた。『修行者たちの階梯』において、彼はスーフィーの術語を分析し、クルアーンに沿わない形の場合は修正した。彼はスーフィズムに代わるスンナ派の靈性に代替するものを模索しており、スーフィズムをイスラーム内部に取り込もうとしていたという³⁸⁾。しかしガザーリー以降、スーフィズムは既にスンナ派イスラームに取り入れられていたため、この結論には疑問も残る。おそらくこれはスーフィズムの「神秘主義」の側面にのみ着目したものではないかと考えられる。

イブン・カイイムのスーフィズム思想研究としておそらく最も有名である [Anjum 2010] は、同じく『修行者たちの階梯』を分析し、この作品はスーフィーとサラフィーの橋渡しをし得るものであると評している。アンジュムはイブン・カイイムのスーフィズムは神秘主義要素を排したものと

37) ターナーウィー (Sadr al-Dīn al-Qūnawī, d. 673/1274) の直弟子で、哲学的傾向が非常に強く、イブン・タイミーヤから激しく非難を受けた。

38) スンナ派におけるスーフィズムの正統性獲得の過程については、[東長 2013: 67-72] を参照のこと。

である³⁹⁾とし、[Schallenberg 2013]とは異なり、スーフィズムを内部に取り込むのではなく神秘的な知識が聖典の知識の優位性に挑戦していなかったスーフィズムの初期の伝統⁴⁰⁾を回復することを望んでいたと論じている。

イブン・タイミーヤはスーフィズム作品を残さなかったことからイブン・カイムの『修行者たちの階梯』は彼独自の思想を見出すことができると考えられることが多いが、この作品はおそらくイブン・タイミーヤの考えの正真正銘の発展であるとアンジュムは主張している。また、ベルとホルツマンは『修行者たちの階梯』におけるワースィティーの指導による影響を大きく見積もっており、ワースィティーによる未完の『旅人たちの宿駅』への注釈がイブン・カイムの『修行者たちの階梯』の執筆に影響を与えたのではないかと述べたこと [Bell 1979: 93–94; Holtzman 2009: 209] に対し、アンジュムはイブン・タイミーヤと比較してワースィティーへの重要な言及が少ないためその影響は僅かなものであるとしている [Anjum 2010: 155]。しかしこの指摘は両者の思想が比較された上での主張ではない。ワースィティーについては2章2節で述べたように、ポストによって研究が進められているため、両者の思想的関係についてはさらなる分析が待ち望まれる。

以上がイブン・カイムのスーフィズム思想に関する先行研究である。従来の先行研究はほとんど『修行者たちの階梯』にのみ焦点を当てており、イブン・カイムのスーフィズム思想が包括的に論じられてきたとは言えない。また、いずれの先行研究もタリーカ研究とは結びついていないという点も挙げられる。マクデイスィーがカーディリー教団の系譜を示して以来、イブン・タイミーヤには注目されてきた。それと関連してイブン・カイムのスーフィズム思想についても関心が少なからず持たれてきた一方で、彼が実際にどのような実践を行ってきたかについては解明されていない。史料が現存していない可能性も考えられるが、弟子のイブン・ラジャブにまでカーディリー教団のシルスィラは繋がっているため、シルスィラが偽造でないとするのであれば、彼がタリーカ内で一切活動してこなかったとするのは不自然である。今後の研究ではイブン・カイムとタリーカの関係についても視野に入れなければならない。

V. おわりに

本稿ではイブン・カイムのスーフィズム思想に関する先行研究を概観した。ハンバル学派とスーフィズムの関係性については注目されてきており、敵対関係にあるとは最早論じられなくなった一方で、イブン・タイミーヤらを除くと個々人のスーフィズム思想に関する研究が十分になされてきたとは言えない。

このことは弟子のイブン・カイムについても同様であり、イブン・カイムのスーフィズム思想については少ないながらも研究がある一方で、これまでの先行研究ではほとんど『修行者たちの階梯』にのみ焦点が当てられており、彼の法学や神学に関する研究と比較するとスーフィズム研究は今なお乏しい。たしかに同作品は非常に重要であるが、この作品に依存してしまうと彼のスーフィズム思想を包括的に追うことができない。また、神学分野の研究で「スーフィズム的」と示唆されることはあるものの、実際にスーフィズム思想研究とは結びついていない問題がある。同様に、スーフィズム思想研究もタリーカ研究とは結びついておらず、検証されてきていない。

本稿ではイブン・カイムのスーフィズム思想に関する先行研究に絞って取り上げたが、今後の

39) スーフィズムは必ずしも神秘主義要素のみによって構成される訳ではなく、民間信仰と倫理によっても構成され得るという「スーフィズムの三極構造論」と近い説である。三極構造論については [東長 2013: 32–47] を参照のこと。

40) イブン・タイミーヤと同じく [東長 2013: 198–203]、例えば彼はジュナイドラの醒めたスーフィーを賞賛していた。

筆者の研究を進めるにあたっては彼の思想を包括的に扱いながら進めていく必要がある。イブン・カイム研究はイブン・タイミーヤ研究の後を追う形で近年盛んに行われているが、スーフィズム分野においては、より一層の発展が求められる。筆者の今後の主要な研究課題としては、第1にスーフィズム思想研究における著作の偏りを正すこと、第2にスーフィズム思想研究と神学思想研究を結びつけること、第3にタリーカとの関係性を明らかにすること、以上のことが挙げられる。

引用文献および先行研究リスト

〈日本語文献〉

石郷岡宏記 2017 「〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉——イブン・タイミーヤ『ファトワー集成』より「奇妙な者たちに幸せあれ」ハディース注解論考の翻訳と解題」『同志社グローバル・スタディーズ』8, pp. 177–204.

—— 2019 「〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉——イブン・カイム『求道者の階梯』「グルバ章」の翻訳および解題「付」アンサーリー・ハラウィー『旅路を行く者』「グルバ章」『同志社グローバル・スタディーズ』10, pp. 191–225.

近藤真美 1999 「マムルーク朝におけるウラマーの家系の隆盛——スブキー家の場合」『オリエント』42(1), pp. 84–102.

ジャウズィーヤ, イブン・カイム 2010 『イスラームの天国』(水谷周訳) 国書刊行会.

東長靖 2013 『イスラームとスーフィズム——神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会.

—— 2014 「イブン・タイミーヤ『書簡・提題論集』より聖者関連論考——解題、翻訳ならびに訳注」『イスラーム世界研究』7, pp. 533–540.

中田考 2002 「イブン・カイム・ジャウズィーヤ」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』

保坂修司 2006 「中東の政治変動を読む(3) 変容するサウジアラビア社会——テロリズム、スーフィズム、シーア派、シネマ」『国際問題』552, pp. 60–67.

松山洋平 2016 『イスラーム神学』作品社.

〈外国語文献〉

Abdul-Mawjūd, Salāhud-Dīn ‘Alī. 2006. *The Biography of Imām ibn al-Qayyim*, (tr) Abdul-Rāfi Adewale Imām. Riyadh: Darussalam.

Anjum, Ovamir. 2010. “Sufism without Mysticism? Ibn Qayyim al-Ġawziyyah’s Objectives in Madāriġ al-Sālikīn,” in Caterina Bori and Livnat Holtzman (eds.), *A Scholar in the Shadow: Essays in the Legal and Theological Thought of Ibn Qayyim al-Ġawziyyah*, Rome: C. A. Nallino, pp. 153–180.

Arif, Syamsuddin, 2013. “Ibn Qayyim al-Jawziyya in the ‘Lands Below the Wind’: An Ideological Father of Radicalism or a Popular Sufi Master?” in Birgit Krawietz and Georges Tamer (eds.), *Islamic Theology, Philosophy and Law: Debating Ibn Taymiyya and Ibn Qayyim al-Jawziyya*, Berlin: De Gruyter, pp. 220–249.

Bakr Abū Zayd. 1995. *Ibn Qayyim al-Jawziyya: Hayātuhu, āthāruhu, mawāriduhu*. Riyadh: Dār al-‘Āšima li al-Nashr wa al-Tawzī‘.

Bell, Joseph N. 1979. *Love Theory in Later Hanbalite Islam*. Albany: State University of New York.

Bori, Caterina and Livnat Holtzman (eds.). 2010. *A Scholar in the Shadow: Essays in the Legal and*

- Theological Thought of Ibn Qayyim al-Ġawziyyah*. Rome: C. A. Nallino.
- Bori, Caterina and Livnat Holtzman. 2010. "A Scholar in the Shadow," in Caterina Bori and Livnat Holtzman (eds.), *A Scholar in the Shadow: Essays in the Legal and Theological Thought of Ibn Qayyim al-Ġawziyyah*, Rome: C. A. Nallino, pp. 13–44.
- Casewit, Yousef. 2017. *The Mystic of al-Andalus: Ibn Barraġān and Islamic Thought in the Twelfth Century*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cooke, Francis T. 1935. "Ibn al-Qaiyim's Kitāb al-Rūḥ," *The Moslem World* 25(2), pp. 129–144.
- Frenkel, Yehoshua. 2010. "Islamic Utopia under the Mamluks: The Social and Legal Ideals of Ibn Qayyim al-Ġawziyyah," in Caterina Bori and Livnat Holtzman (eds.), *A Scholar in the Shadow: Essays in the Legal and Theological Thought of Ibn Qayyim al-Ġawziyyah*, Rome: C. A. Nallino, pp. 67–87.
- Gobillot, Geneviève. 2010. "Corps (badan), âme (nafs), et esprit (rūḥ), selon Ibn Qayyim al-Ġawziyyah à travers son *Kitāb al-rūḥ*. Entre théologie rationnelle et pensée mystique," in Caterina Bori and Livnat Holtzman (eds.), *A Scholar in the Shadow: Essays in the Legal and Theological Thought of Ibn Qayyim al-Ġawziyyah*, Rome: C. A. Nallino, pp. 229–258.
- Held, Pascal. 2016. "The Ḥanbalī School and Mysticism in Sixth/Twelfth-Century Baghdad." Chicago: University of Chicago, Ph. D. diss.
- . 2020. "Traces of Mysticism in Ibn al-Jawzī's Thought; an Examination of His *Baḥr al-Dumū'*," *Journal of Islamic Studies* 31(2), pp. 141–172.
- Holtzman, Livnat. 2009. "Ibn Qayyim al-jawziyyah," in Devin Stewart and Joseph Lowry (eds.), *Essays in Arabic Literary Biography*, Wiesbaden: Harrassowitz, pp. 202–223.
- . 2013. "Debating the Doctrine of *Jabr* (Compulsion): Ibn Qayyim al-Jawziyya Reads Fakhr al-Dīn al-Rāzī," in Birgit Krawietz and Georges Tamer (eds.), *Islamic Theology, Philosophy and Law: Debating Ibn Taymiyya and Ibn Qayyim al-Jawziyya*, Berlin: De Gruyter, pp. 61–93.
- Hoover, Jon. 2009. "Islamic Universalism: Ibn Qayyim al-Jawziyya's Salafī Deliberations on the Duration of Hell-Fire," *Muslim World* 99(1), pp. 181–201.
- . 2010. "The Apologetic and Pastoral Intentions of Ibn Qayyim al-Jawziyya's Polemic against Jews and Christians," *Muslim World* 100(4), pp. 476–489.
- . 2016. "Ḥanbalī Theology," in Sabine Schmidtke (ed.), *The Oxford Handbook of Islamic Theology*, Oxford: Oxford University Press, pp. 625–646.
- . 2019. *Ibn Taymiyya*. London: Oneworld Academic.
- Ibn 'Arīf. 1980. *Maḥāsīn al-majālis: The Attractions of Mystical sessions*, (tr.) William Elliott and Adnan K. Abdulla, Amersham: Avebury.
- al-Jawzīya, Ibn Qayyim. 1331/1912–1333/1915. *Madārij al-Sālikīn bayna Manāzil Īyāka Na'budu wa Īyāka Nasta'in*. 3 vols., Muḥammad Rashīd Riḍā (ed.), Cairo: Maṭba'a al-Manār.
- . 2000. *Ibn Qayyim al-Jawziyya on the Invocation of God: Al-Wābil al-Ṣayyib min al-Kalim al-Ṭayyib*, (tr.) Michael Abdurrahman Fitzgerald and Moulay Youssef Slitine. Cambridge: The Islamic Texts Society.
- . 1423/2003. *Madārij al-Sālikīn bayna Manāzil Īyāka Na'budu wa Īyāka Nasta'in*. 7th ed., 3 vols., Muḥammad al-Mu'taṣim Billāh al-Baghdādī (ed.), Beirut: Dār al-Kitāb al-'Arabī.

- . 2016. *Ibn Qayyim al-Jawziyya on Knowledge: from Key to the Blissful Abode Miftāḥ Dār al-Sa'āda*, (tr.) Tallal M. Zeni. Cambridge: The Islamic Texts Society.
- . 2020. *Ranks of the Divine Seekers: A Parallel English-Arabic Text*. 2 vols., (tr.) Ovamir Anjum. Leiden: Brill.
- Kokoschka, Alina and Birgit Krawietz. 2013. "Appropriation of Ibn Taymiyya and Ibn Qayyim al-Jawziyya: Challenging Expectations of Ingenuity," in Birgit Krawietz and Georges Tamer (eds.), *Islamic Theology, Philosophy and Law: Debating Ibn Taymiyya and Ibn Qayyim al-Jawziyya*, Berlin: De Gruyter, pp. 1–33.
- Krawietz, Birgit. 2006. "Ibn Qayyim al-Jawziyyah: His Life and Works," *Mamlūk Studies Review* 10(2), pp. 19–64.
- Krawietz, Birgit and Georges Tamer (eds.). 2013. *Islamic Theology, Philosophy and Law: Debating Ibn Taymiyya and Ibn Qayyim al-Jawziyya*. Berlin: De Gruyter.
- Laoust, Henri. 1965. *Les schismes dans l'Islam: Introduction à une étude de la religion musulmane*. Paris: Payot.
- . 1971. "Ibn Qayyim al-Djawziyya," *ET*, 3, pp. 821–822.
- Livingston, John W. 1992. "Science and the Occult in the Thinking of Ibn Qayyim al-Jawziyya," *Journal of the American Oriental Society* 112(4), pp. 598–610.
- Langermann, Tzvi. 2013. "Ibn al-Qayyim's *Kitāb al-Rūḥ*: Some Literary Aspects," in Birgit Krawietz and Georges Tamer (eds.), *Islamic Theology, Philosophy and Law: Debating Ibn Taymiyya and Ibn Qayyim al-Jawziyya*, Berlin: De Gruyter, pp. 123–145.
- Makdisi, George. 1973. "Ibn Taymiyya: A Šūfi of the Qādiriyya Order," *American Journal of Arabic Studies* 1, pp. 118–129.
- . 1979. "The Hanbali School and Sufism," *Boletín de la Asociación Española de Orientalistas* 15, pp. 115–126.
- Meier, Fritz. 1999. "The Cleanest about Predestination: A Bit of Ibn Taymiyya," *Essays on Islamic Piety and Mysticism*, (tr.) John O'kane with Editorial Assistance of Bernd Radtke. Leiden: Brill, pp. 309–334.
- Melchert, Christopher. 2001. "The Ḥanābila and the Early Sufis," *Arabica* 48(3), pp. 352–367.
- . 2013. "The Relation of Ibn Taymiyya and Ibn Qayyim al-Jawziyya to the Ḥanbalī School of Law," in Birgit Krawietz and Georges Tamer (eds.), *Islamic Theology, Philosophy and Law: Debating Ibn Taymiyya and Ibn Qayyim al-Jawziyya*, Berlin: De Gruyter, pp. 146–161.
- Michot, Yahya. 2007. "Ibn Taymiyya's Commentary on the Creed of al-Ḥallāj," Ayman Shihadeh (ed.), *Sufism and Theology*, Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 123–136.
- Ovadia, Miriam. 2018. *Ibn Qayyim al-Jawziyya and the Divine Attributes: Rationalized Traditionalistic Theology*. Leiden: Brill.
- Pagani, Samuela. 2015. "Ibn 'Arabī, Ibn Qayyim al-Jawziyya, and the Political Functions of Punishment in the Islamic Hell," in Christian Lange (ed.), *Locating Hell in Islamic Traditions*, Leiden: Brill, pp. 175–207.
- Post, Arjan. 2016. "A Glimpse of Sufism from the Circle of Ibn Taymiyya," *Journal of Sufi Studies* 5(2), pp. 156–187.

- . 2017. “The Journey of a Taymiyyan Sufi: Sufism through the Eyes of ‘Imād al-Dīn Aḥmad al-Wāsiṭī (d. 711/1311).” Utrecht: Utrecht University, Ph. D. diss.
- . 2020. *The Journeys of a Taymiyyan Sufi: Sufism through the Eyes of ‘Imād al-Dīn Aḥmad al-Wāsiṭī (d. 711/1311)*. Leiden: Brill.
- Sarrío, Diego R. 2011. “Spiritual anti-elitism: Ibn Taymiyya’s doctrine of sainthood (*walāya*),” *Islam and Christian-Muslim Relations* 22(3), pp. 275–291.
- Schallenbergh, Gino. 2001. “The Diseases of the Heart: A spiritual Pathology by Ibn Qayyim al-Ġawzīya,” in Urbain Vermeulen and Jo Van Steenbergen(eds.), *Egypt and Syria in the Fatimid, Ayyubid and Mamluk Eras III: Proceedings of the 6th, 7th and 8th International Colloquium Organized at the Katholieke Universiteit Leuven in May 1997, 1998 and 1999*, Leuven: Uitgeverij Peeters, pp. 421–428.
- . 2005. “Intoxication and Ecstasy: Sufi Terminology in the Work of Ibn Qayyim al-Ġawzīya,” in Urbain Vermeulen and Jo van Steenbergen (eds.), *Egypt and Syria in the Fatimid, Ayyubid and Mamluk Eras IV: Proceedings of the 9th and 10th International Colloquium Organized at the Katholieke Universiteit Leuven in May 2000 and 2001*, Leuven: Uitgeverij Peeters, pp. 459–474.
- . 2008a. “Ibn Qayyim al-Jawziyya on Sufi terminology: The Concept of the Spiritual Path (*ṭarīq*),” in Kristof D’Hulster and Jo Van Steenbergen (eds.), *Continuity and Change in the Realms of Islam: Studies in Honour of Professor Urbain Vermeulen*, Leuven: Uitgeverij Peeters en Departement Oosterse Studies, pp. 555–565.
- . 2008b (unpublished). “Ibn Qayyim al-Ġawzīya’s Ḥanbalite Interpretation of Sufi Terminology in the Light of at-Tilimsānī’s Commentary on al-Ansārī’s *Manāzil al-Sā’irīn*.” Gent: Universiteit Gent, Ph. D. diss.
- . 2010. “The Invocation of God (*dhikr*) and Audition (*samā*) in the Spirituality of Ibn Qayyim al-Jawziyya (d. 751/1350),” in Urbain Vermeulen and Kristof D’Hulster (eds.), *In Egypt and Syria in the Fatimid, Ayyubid and Mamluk Eras VI: Proceedings of the 14th and 15th International Colloquium Organized at the Katholieke Universiteit Louven in May 2005 and May 2006*, Leuven: Uitgeverij Peeters, pp. 355–368.
- . 2013. “Ibn Qayyim Al-Jawziyya’s Manipulation of Sufi Terms: Fear and Hope,” in Birgit Krawietz and Georges Tamer (eds.), *Islamic Theology, Philosophy and Law: Debating Ibn Taymiyya and Ibn Qayyim al-Jawziyya*, Berlin: De Gruyter, pp. 94–122.
- Sharaf al-Dīn, ‘Abd al-‘Azīm ‘Abd al-Salām. 2004. *Ibn Qayyim al-Jawzīya: ‘Aṣru-hu wa Manhaju-hu wa Ārā’-hu fī al-Fiqh wa al-‘Aqā’id wa al-Taṣawwuf*. Cairo: al-Dār al-Dawliya li al-Istithmārāt al-Thaqāfiya.
- Sheikh, Mustapha. 2018. “Taymiyyan *Taṣawwuf* Meets Ottoman Orthodoxy: Reformed Sufism in the Thought of Aḥmad al-Rūmī al-Āqḥiṣārī,” *Muslim World* 108(1), pp. 186–206.
- al-Shibl, ‘Alī ibn ‘Abd al-‘Azīz. 1423/2002. *Al-Aṭḥbāt fī Makhṭūṭāt al-‘Imma: Shaykh al-Islām Ibn Taymīya wa al-‘Allāma Ibn al-Qayyim wa al-Ḥāfiẓ Ibn Rajab*. Riyadh: Maktaba al-Malik Fahd al-Waṭaniya.
- Sliti, Abdullah. 2015. “A Lost Legacy of Critical Engagement: Ibn al-Qayyim on Divine Determination (*qadar*).” Durham: Durham University, Ph. D. diss.

〈CD-ROM〉

al-Jawzīya, Ibn Qayyim. 1419/1999. *Mu'allafāt Shaykh al-Islām Ibn Taymīya wa Tilmādhīhi Ibn al-Qayyim*. Amman: al-Turāth Markaz li Abḥāth al-Ḥāsib al-Ālī.

〈ウェブサイト〉

Ambah, Faiza Saleh. 2006 (May 2). "In Saudi Arabia, a Resurgence of Sufism Mystical Sect of Islam Finds Its Voice in More Tolerant Post-9/11 Era," *Washington Post*. <<https://www.washingtonpost.com/archive/politics/2006/05/02/in-saudi-arabia-a-resurgence-of-sufism-span-classbankheadmystical-sect-of-islam-finds-its-voice-in-more-tolerant-post-911-eraspan/bdfd5280-fcda-4640-9f17-92f52c48f07c/>> (2020年7月31日閲覧)